

# 皇室が目指す社会

かんだ あゆか  
神田 歩夏

(しがく総合研究所)

## ―障害者週間から考える―

### 障害者福祉について考える週間に

毎年、十二月三日から九日までは障害者週間と定められている。その目的は、国民の障害者福祉についての関心と理解を深め、障害者があらゆる分野の活動に積極的に参加する意欲を高めることである。

障害者福祉に多大な貢献をされている方々の中に、皇室がある。本稿では、皇室の障害

者支援の中でも、特に上皇陛下がご支援くださった障害者スポーツについて紹介する。

#### 一・上皇陛下の

#### 障害者スポーツへの「献身

上皇陛下は国内の障害者スポーツの普及に大きく貢献された。

きっかけは一九六四年のパラリンピック東京大会だ。

当時の日本では、障害者は施設に入所して寝たきりの生活を送ったり、施設に入所できない障害者は家で何年も風呂に入れない生活を送ったりと、施設や環境が充分だったとはいえなかった。たとえ障害者スポーツといっても、障害者の社会復帰を目的とした、リハビリ色の強いものにすぎなかった。

そのため、大会を観戦された上皇陛下（当時皇太子殿下）は「日本の選手が病院や施設にいる人が多かったのに反して、外国の選手は大部分が社会人であることを知り、外国のリハビリテーションが行き届いていると思いました。」と仰っている。上皇陛下は続けて、「このような大会を国内でも毎年行ってもらいたいと思います。」とも話され、それを発端に全国障害者スポーツ大会の開催が決定し

た。

そこで当時の厚生省は、日本最大の国民スポーツの祭典である国民体育大会後の開催を目指し、約一年後に国体開催場所となっていた岐阜県に障害者スポーツ大会の開催を打診した。ところが、岐阜県からは一年を切った段階でそれは無理だと断られた。これに対して岐阜県の身体障害者団体が立ち上がり、声を上げたことで、日本障がい者スポーツ協会が結成し、全国障害者スポーツ大会の開催に至った。

当初は開催が危ぶまれた全国障害者スポーツ大会だったが、上皇陛下のご支援を受け現在まで続く大会となっている。

毎年行われる大会に、上皇陛下がご欠席されたのはご都合がつかなかった一回のみで、

天皇にご即位されるまでほぼ全ての大会に上皇后陛下と共にご出席された。当初、上皇陛下のご観戦は最初の五年間の予定だったという。しかし、継続を希望する障害者らの署名が宮内庁へ届けられたことを受け、上皇上皇后陛下のご出席が続けられたのだ。

さらに、上皇陛下は選手の激励会にも参加されたり、大会へお出ましの際は必ず地元の障害者施設をご訪問されたりするなど、選手や関係者らとの交流も継続された。

このように、日本で障害者スポーツが普及した理由には、上皇陛下のご献身があった。

## 二．誰もが楽しめる 障害者スポーツに

上皇陛下（当時天皇陛下）は、お誕生日に

子供たちが心配そうにこちらを見ておりましたので、どうかしてこれをつなげなければと思います、陛下のお許しを頂いて加わりました。」と話されている。

上皇上皇后陛下が率先してご観戦をお楽しみなることで、大会が大きく話題となり、パラリンピックをはじめとした障害者スポーツが誰もが楽しめるものとなった。

上皇陛下は、障害者スポーツを競技参加者も観戦者も含め、障害の有無にかかわらず「皆」が楽しめるようにとお考えだった。それを日本で実現するためには、皇室のご支援が欠かせなかっただろう。

では、何年にもわたり大会のご観戦や、障害者との交流を積極的にされてきたのは、どのような思いからなのか。

際しての記者会見で「障害者のスポーツは、ヨーロッパでリハビリテーションのために始まったものでしたが、それを越えて、障害者自身がスポーツを楽しみ、さらに、それを見る人も楽しむスポーツとなることを私どもは願ってきました。パラリンピックを始め、国内で毎年行われる障害者スポーツ大会を、皆が楽しんでいることを感慨深く思います。」と仰った。

障害者スポーツ大会を「皆」が楽しむとはどういうことなのだろうか。

一九九八年、長野県で開催されたパラリンピック冬季競技大会では、上皇后陛下（当時皇后陛下）が観客席のウェブに参加され、話題となった。上皇后陛下は、「不思議な波が、私たちの少し前で何回か止まり、左手の

## 三．私たちが目指すべき社会

上皇陛下は、天皇ご即位十年に際しての記者会見で、「心の絆を強め、様々な課題に対するためめない努力により、皆が幸せな気持ちになれるような社会を築いていくことを期待しております。」と話された。

上皇陛下は、障害者スポーツは競技参加者などの障害者が盛り上がるだけでなく、観客としての健常者も含めた文字通り「皆」が共に幸せになる社会を望まれている。障害者スポーツへのご支援は、「すべての人が幸せな社会を」というお心からだったのだ。

このような上皇陛下の想いを受け止め、わたしたちも皆が幸せな社会を目指し続けよう。

